

アラビヤンナイト

三、アリ・ババと四十人のどろぼう

菊池寛

青空文庫

昔、ペルシャのある町に、二人の兄弟が住んでいました。兄さんの名をカシムと言い、弟の名をアリ・ババと言いました。お父さんがなくなる時、兄弟二人に、財産ざいさんを半分ずつに分けてくれましたので、二人は、同じような財産を持っておりました。

さて、カシムはお金持のおじょうさんをおよめさんにももらいました。それからアリ・ババは貧乏びんぼうな娘をおかみさんにももらいました。お金持のおじょうさんをもらったカシムは、毎日ぶらぶら遊んでくらししていましたが、そのはんたいに、アリ・ババは毎日せつせと働かなくてはなりませんでした。毎朝早くから三びきのろばを引いて森へ出かけて、木を切つては、それを町へ持つて帰つて売つて、そのお金で、やつとその日その日をくらししてゆくというありさまでした。

ある日のこと、アリ・ババが、いつものように森へ行つて木を切つていますと、はるか向うの方に、まっ黒い砂けむりが、もうもうと立っているのが見えました。その砂けむりは、見るまにこちらへ近づいて来ましたが、見れば、それはたくさんの人が馬に乗つて、いそいでかけて来るのでした。

「きつと、どろぼうにちがいない。」アリ・ババはふるえながら、三びきのろばをかくし

て、自分はそばの木にのぼりました。そして、こわごわ様子ようすを見ていました。

アリ・ババののぼった木の下まで来ると、どろぼうたちは、みんな馬からとびおりました。くらにつけてあつた袋もおろしました。

そして、そのどろぼうたちのかしららしい男が、木のそばにある岩の上へのぼって行きました。そしていきなり、

「開ひらけ、ごま。」

と、大きな声でさげびました。すると、どうでしょう。その岩が、ぱつと二つにわれしました。中には重そうな戸が閉しまっているのが見えました。やがて、その戸は見る見るうちにすうーつと開いてゆきました。そして、どろぼうたちが、その戸の中へどかどか入って行くと、音もなく戸が閉しまってしまいました。

やがてまもなく、どろぼうたちは出て来ました。さっきのかしらも、また、

「閉しまれ、ごま。」

と、さげびました。戸はすうーつと閉しまってしまいました。そして岩も、もとの岩になつてしまいました。どろぼうたちはどこかへ去つてしまいました。

アリ・ババは木からおりました。そして、さっきどろぼうのかしらと言った、ふしぎな

言葉をおぼえていたものですから、岩の上へのぼって、

「開け、ごま。」と、どなってみました。

そうすると、やつぱり岩がわれて、さっきの戸が開きました。アリ・ババは中へ入って行ききました。その中は大きなほら穴でした。りっぱな宝たからもの物や、金貨きんかや銀貨をつめこんだ大きな袋ふくろが、すみからすみまで、ぎっしりとつみ重ねてありました。これだけのものをあつめるには、まあ何年かかったことだろうと、アリ・ババは思いました。そしておそるおそる、金貨をつめこんだ袋ばかりを六つ取り出しました。そして手早く三びきのろばにつんで、その上に金貨の袋がかくれるほど、切った木をつみ重ねました。それから、

「閉まれ、ごま。」と、大きく言いました。そうすると戸はやつぱり閉まって、岩にはあとかたもなくなくなりました。

アリ・ババは家へ帰って来ました。おかみさんは金貨の袋を見て、大へん悲かなしそうな、またこわいような顔をして、アリ・ババに泣きつきました。

「まあ、お前さん、もしかしたらこれは？……」とまで言って、それからさきはもう声が出ない様子でした。

するとアリ・ババは落ちつきはらって、

「安心おしよ。なんで私がどろぼうなんかするものかね。そりや、この袋は、もともとだれかがぬすんだものには、ちがいないがね。」

と、言いました。それから、金貨の袋を見つけたいちぶしじゅうを話して聞かせました。

それを聞いて、貧乏なこのおかみさんは大へんよろこびました。そして、アリ・ババが袋からつかみ出す金貨を、「一枚、^{まい}二枚」とかぞえはじめました。

そのうちアリ・ババが、ふと気がついたように顔を上げて、

「そんなかぞえ方をするのはばかだね。そんなことをしていたら、みんなかぞえてしまうには何週間かかるかわかりやあしないよ。いつそこれは、このまんま、庭へ穴を掘^ほつてうずめようじゃないか。」と、言いました。

するとおかみさんは、

「でも、私たちがどれほどのお金持になったのか、知っておいた方がよござんすよ。」

そう言つて、はんたいしました。そして、

「私はこれからカシム兄さんのところへ行つて、ますをかりて来ましよう。そのますで、私がこの金貨をはかっている間に、お前さんが穴を掘つたらいいじゃありませんか。」と、言いました。そして、おかみさんは、カシムの家へ出かけて行きました。

カシムの家では、ちょうどカシムがるすでした。それでカシムのおかみさんに、「姉さん^{ねえ}。すみませんが、ますをかしてください。」とたのみました。

「すぐに返しに来るなら、かしてあげてもよござんす。」

カシムのおかみさんは、ぶあいそうな顔をしてこう答えました。そして、どうしてアリ・ババの家でますがいるのか、ふしぎに思ったものですから、ますの底^{そこ}に少しばかりラード（ぶたの油）をぬつて、かしてくれました。こうしておけば、このますで何をはかったにしろ、底にくつついて返ってくるにちがいないと考えついたからでした。

アリ・ババのおかみさんは、ますをかりて、大いそぎで帰って来ました。そして金貨をはかつてしまうと、また大いそぎで返しに行きました。けれども、ますの底に、一枚の金貨がくつついていたということには、ちっとも気がつきませんでした。

「まあ、なんてことだろう。アリ・ババの家では、あんまりお金がどっさり入ったので、かぞえきれないで、ますではかったんだね。」

カシムのおかみさんは、金貨を見つけて、いまいましそうにどなりました。

カシムが帰って来て、この話を聞いて、もっともっとおこりました。そしてすぐに、アリ・ババの家へ出かけて行きました。

「何だつてお前はかくすんだね。私の家内かないは、お前がかぞえきれないほどたくさんのお金を手に入れたので、まずではかつたつてことを、ちやあんとかぎつけてるんだよ。さあどうして、そんなにたくさんのお金をこしらえたのか、はくじようしろ。」と、アリ・ババにしかるように申しました。

アリ・ババは、せっかくかくしていたことを知られてしまったので、がっかりしました。仕方がないので、兄さんに何もかも話してしまいました。そして、

「きつと、だれにも言わないでくださいよ。」と、言いながら、あの、「開け、ごま。」
「閉まれ、ごま。」という言葉を、教えてしまいました。

カシムは、自分の家へ帰つて来て、十二ひきのろばを馬やから引き出しました。そして、それを引いて森の岩をさして出かけました。岩の前まで来た時、ろばをそばの木につないでおいて、

「開け、ごま。」
と、言いました。すぐに岩がわれて、あのふしぎな戸が開きました。

もともとカシムは、大へんなよくばりやでした。それで、どろぼうたちの宝物を見て、とび上るほどよろこびました。そして、金貨の入っている大きな袋をえらんで、それ

を二十四も、戸のところまで引きずり出して来ました。そして、

「開け、大麦。」と、さげびました。

まあ、どうしたのでしょうか、戸は閉まったままでした。カシムはあわてて、

「開け、あずき。」と、言ってみました。けれども、やっぱり戸は開きませんでした。それからはもうますますあわてて、

「開け、小麦。」だの、「開け、あわ。」だのと、おぼえているかぎりの、穀物こくもつの名を言ってみましたけれど、やっぱり、だめでした。戸は一寸も開きませんでした。カシムは「ごま」をすっかり忘れていたのでした。

ちやうどその時、どろぼうたちが馬に乗って帰って来ました。そして、かしらが、

「開け、ごま。」

と、さげんで、ほら穴の中へ入って来ました。そして、カシムと、引きずり出した金貨の袋とを見つけてしまいました。

どろぼうたちは、自分たちの、人にかくしていたお倉くらを見つけられたので、大へん腹を立てました。そして、いきなりカシムをつかまえて、切り殺ころして、からだの肉を切りきざんでしまいました。そして、ここへだれでも金貨をぬすみに来ないように、カシムの肉の

きれを一つ一つ、ほら穴の中へつるしました。

カシムのおかみさんは、夜になつてもカシムが帰つて来ないので、大へん心配しました。そして、アリ・ババの家へ行つて、カシムをさがしに行つてくれとたのみました。それでアリ・ババは、あくる朝早く、三びきのろばを引いて、ほら穴さして出かけました。

「開け、ごま。」そう言つてから、アリ・ババは中へ入つて行きました。しかし入るとすぐに、おそれてちぢみ上つてしまいました。兄さんが殺されて、切りきざまれていましたから。アリ・ババは、ふるえながら、兄さんの切りきざまれた肉を、一きれずつていねいによせあつめて、二ひきのろばにつみました。そして、あとの一ぴきは強い小さな黒馬でしたが、これには金貨の袋を二つつみました。

アリ・ババは町へ歸つて来て、まずカシムの家の戸をたたきました。すると、モルジアナという女どれいが出て来ました。この女はカシムの召使めしつかいの中でも、一番りこう者でありました。

アリ・ババはモルジアナを招まねいて、その耳に口をつけて、

「お前のご主人はね、どろぼうに切りきざまれて殺されてしまったのだよ。けれども、だれもまだこのことを知っている人はないのだからね、お前これを、だれにも知らさないで

すますような工夫くふうをしておくれ。」

と、たのみました。

それから、アリ・ババは家の中へ入って行って、カシムのおかみさんに、いつさいの話をして聞かせました。

「けっして、悲しんではいけませんよ。これからは私たちと一しよにくらしましょう。私たちの宝物も分けてあげましょう。私たちはよく気をつけて、このことを、人にさとられないようにしましょうね。」

と、約束しました。

それから、切りきざまれた、かわいそうなカシムを、ろばからおろして、となり近所の人々には、ゆうべ急病で死んだと言っておきました。

モルジアナは、だいぶはなれた町の、おじいさんのくつ屋をたずねて行きました。そして、針はりと糸とを持って自分と一しよに来てください、とたのみました。それから、

「お前さんにたのみたい仕事というのは、どうしても人に知られてはならないことだからね、気の毒どくだけれど、お前さんに目かくしをして、その家まで私が手を引いて行くのですよ。」と、言いました。

おじいさんのくつ屋は、はじめはいやだと言いましたけれども、モルジアナが金貨を一枚そつとその手ににぎらせましたら、すぐしようちしました。モルジアナは、このくつ屋をつれて帰つて来て、切りきぎまれた主人の肉を、ぬいあわせるように言いつけました。

くつ屋は、だれだって、ぬいあわせたとは思えないほど、かつこうよくつきあわせました。それからモルジアナはまた、くつ屋に目かくしをして、その店までつれて行きました。

こんなふうにして、カシムが殺されたことは、だれにも知れないですみそうでした。そして、アリ・ババとそのおかみさんとは、カシムの家に引っこして行つて、みんなでしよにくらすことになりました。

けれども、その後どろぼうたちは、あのほら穴へ帰つて、カシムの中からだと、金貨の袋がまた二つもなくなっているのに、気がつきました。そして大へんおこりました。

「もう一人、おれたちのお倉を知っているやつがあるんだな、そいつをすぐに見つけなきゃならない。」と、さげびました。

そうして、仲間なかまの一人が、どろぼうでないような風をして町へ行つて、あの切りきぎさんだからだをぬすんで行つた者を、見つけて来ることにしようかと相談がきまりました。

さて、あくる朝、どろぼうの一人が、とても早く町へやって来ました。その時分は、カシムのからだをぬいあわせたおじいさんのくつ屋の店は、もう戸をあけていました。

「お早う、おじいさん。大へん、ごせいが出ますね。ほう、お前さん、こんなに早くから仕事をはじめますか。ふむ、だが、お前さんの目が、こんなうすあかりで見えるんですかねえ。」

と、どろぼうは、さもなれなれしく声をかけました。すると、くつ屋は、

「どうしてどうして、あつしの目はね、若い者だつてかなやあしないんですよ。げんに、たつたきのうのことですがね、あつしやあ、切りきざんだ人間の死がいぬいあわせましたよ。それがお前さん、だれが見たつてぬい目なんかちつともわからないように、うまくできたんですよ。」と答えたのでした。

どろぼうは、しめたと思いました。そして、

「え？ そりやほんとうですか。そして、そりや、どこの、だ、だれのです。」と、聞き返しました。

「それがね、あつしにだつてわからないんです。なぜかって、あつしやあ、目かくしをして、その家へつれて行かれて、また同じようにして、つれて帰ってもらったんですから

。「と、くつ屋が言いました。

すると、どろぼうは、金貨を一枚、そつとくつ屋にぎらせました。そして、その家へつれて行ってくれないかとたのみました。

「お前さんにまた目かくしをして、私が手を引いて行ったら、おおよそのけんとうがつくでしょう。もしその家がわかったら、もつとお金をあげますよ。」と、言うのです。

そこで、とうとうくつ屋は、しようちしました。そして、目かくしをされて、そろそろ歩きながら、カシムの家の前まで来た時、ぴたりととまりました。そして、

「ここにちがいありません。このくらいの遠さだったと思います。」と、言いました。

そこで、どろぼうはポケットからチョークを出して、カシムの家の戸に白い目じるしをつけました。そして大元気で、森の仲間のところへ帰って行きました。

それからまもなく、モルジアナは、このへんな目じるしを見つけました。

これはきつと、だんなさまに悪いことをしようとする者が見つけたしるしにちがいない、とモルジアナは思いました。それで、チョークを取って来て、町じゅうのどの家の戸にも、みんな同じようなしるしをつけて歩きました。

さて、どろぼうたちは、町へ行つた仲間から、あの切りきぎんだ人間の家がわかったと

いうことを聞いて、大へんよろこびました。そしてその晩、戸に白い目じるしのついている家をさして、かたきうちに出かけました。けれども、町までおしかけて来た時、どの家の戸にも同じ目じるしがついているので、どれが目ざす家だか、かいもく知れませんでした。

「ばかめ、これが、りこうな人間のすることかい。お前は、すぐに殺してやるから待っている。」

かしらは、けさ見つけに来たどろぼうを、こう言ってしかりつけました。それから、「仕方がない、どろぼうの家はおれがさがすことにしよう。」と、言いました。

次の日、かしらは、ふつうの人のような風ふうをして、くつ屋の店へ行つて、カシムの家を教えてもらいました。けれども、このかしらはりこう者ですから、チョークでしるしをついたりなんかはしませんでした。気をつけてカシムの家を見て、しっかりとおぼえこんで、晩のかたきうちの用意をしに、森へ帰りました。

そして、まずはじめに、ろばを二十ぴきと、大きなかめを三十九と持ち出しました。そして、たった一つのかめに、油をなみなみとつきこんだきりで、ほかのかめには一人ずつどろぼうを入らせました。そして、このかめをろばにのせて、町へ出かけました。そして、

カシムの家の前まで来ましたら、アリ・ババはちょうど、外へ出て夕涼みゆうずみをしているところでした。

「今晚は。」

かしらは、ていねいにおじぎをして、

「私は遠方えんぽうからまいった油商人でございますが、今晚だけ、とめていただけませんでしょうか。そして、この油がめをお庭のすみにもおかせていただけたら、大へんつごうがよいのでございます。」と、たのみました。

「ああ、よろしいとも。さあお入んなさい、さあ、さあ。」

すぐにアリ・ババは、きげんよくしようちしました。そして門をあけて、ろばを庭の中へ入れさせました。それから召使のモルジアナに、お客さまにごちそうをしてあげるように、と言いつけました。

かしらは、ろばの背中から、かめを庭へおろしながら、中にいる一人々々のどろぼうに、自分が庭へ小石を投げたら、それをあいずに、かめのふたをやぶって、出て来いと言いつけました。

どろぼうたちは、せまいかめの中で、じっとしんぼうしながら、あいずがあるのを、今

か今かと待っていました。

さて、台所では、モルジアナが、夕ごはんのしたくに、てんてこまいをしていました。ところが、そのいそがしいまつさいちゆうに、ランプがふつと消えてしまいました。あいにく家に油がきれいでいました。それで、あの庭にあるたくさんの大きなかめから、少しくらいもらったついでいいだろう、と思つて、ランプを持つて庭へ出て行きました。そして、一ばん手近のかめのそばまで行きました。すると中から、

「もう、出る時じぶん分ですか。」と言う、しゃがれた声が聞えました。モルジアナは、びつくりしました。けれども、りこう者のことですから、落ちついた声で、

「まだ、まだ。」

そう言つて、次のかめのそばへ行きました。そのかめの中からも、同じようなことをたずねました。モルジアナは次から次と行きました。すると、どのかめからも、どのかめからも同じようなことをたずねました。モルジアナはどれにも同じように、「まだ、まだ。」と言つておきました。そして一番おしまいかめにだけ、ほんとうの油がなみなみと入っていたのでありました。

「あああ、まあ、なんてふしぎな油商人なんだろう。全く、あきれてしまう。だが、これ

はきつと、だんなさまを殺すつもりにちがいない。」

モルジアナは、うっかりしては大へんだと思いました。

そこで、すぐに大きなつぼを持って来て、一番おしまいのかめから油をくみ出して、それを火の上にかかけました。そして油がにえ立つのを待つて、それを、どろぼうたちのかくれているかめの中へ、次々とついで歩きました。それでどろぼうたちは、みんな殺されてしまいました。

こんなにしてしまったものですから、かしらが庭をめぐって小石を投げた時は、どろぼうは一人だつて出て来ませんでした。それで、かしらが庭へ出て、かめの中をのぞきますと、どろぼうたちはみんな死んでいたのです。せっかくのかたきうちには、すっかりあべこべになつてしまつたのです。かしらは、ほうほうのていで、森へにげて帰りました。

あくる朝、モルジアナは、アリ・ババを庭へつれ出して、かめの中をのぞかせました。アリ・ババは人がいるのを見て、とび上るほどおどろきました。けれども、モルジアナが、手つとり早く、すっかり話をして聞かせましたので、どろぼうは、みんな死んでしまつて、いるのだということがわかりました。

アリ・ババは、こんな大きなきいなんからのがれたことがわかつて、大へんよろこびま

した。そして、モルジアナに、

「ありがとう、ほんとうにありがとう。もうお前はどれいをやめてもいい。お前を自由な身にしてあげよう。また、そのほかにごほうびもあげよう。」と、言いました。

さて、どろぼうのかしらは、手下が一人もいなくなったので、森のほら穴で、ただ一人大そうさびしく、また悲しい月日をおくつていました。けれども、アリ・ババへかたきうちをすることは、前よりもつとつと熱心ねっしんに考えていました。そして、またある一つの方法を考えつきました。そして、さつそく大きな商人のような顔をして、アリ・ババの息子むすこの店のお向いに店を出しました。

この大商人は大そう金持で、そして大そうしんせつでありましたから、アリ・ババの息子は、すぐにこの人をすきになりました。それで、お近づきのしるしとして、お父さんの家の晩ごはんによぶことにしました。しかし、このにせの商人は、アリ・ババの家へ行つた時、アリ・ババに向つて、

「あなたとご一しよにごはんをいただきたいのは山々でございしますが、じつは私は、神さまに塩しおを食べませんと言つてお約束やくそくしているのをございます。それで、家でも、とくべ

つにいつも塩ぬきのりようりをさせているようなわけでごぎいますから、どうかあしからず。」

と言つて、ごはんをたべることをことわりしました。するとアリ・ババは、

「まあ、そんなことなら、どうさもないことでごぎいますよ。今晩は、いつさい、塩を入れないように申しつけますから。」と言つて、引きとめました。

モルジアナは、この言いつけを聞いた時、少しへんだなと思いました。それで、おきゅうじに出た時、お客さまをよく気をつけて見ました。ところが、どうでしょう、そのお客さまはどろぼうのかしらで、しかも、そでの中に短たんとう刀をかくして持っているのがわかりました。モルジアナはおどろいてしまいました。

「ふん、かたきと一しよに、塩をたべないのはふしぎじゃない。」と、モルジアナは心のうちでつぶやきました。ペルシャには、こういう迷めいしん信があるのです。

モルジアナは、すぐに自分のへやへもどつて来て、おどり子の着る着物を着ました。そして、晩ごはんが終つた頃を見はからつて、短刀を片手ににぎつて、お客さまのぎしきへおどりをおどりに出ました。

モルジアナは大そうじょうじょうにおどつて、みんなにかっさいされました。にせの商人は、

さいふから金貨を一枚出して、モルジアナのタンボリン（手つづみ）の中へ入れました。その時モルジアナは、片手に持っていた短刀を、やにわに商人の胸むねにつきさしました。

「ふとどき者め、お客さまをどうしようというのだ。」

アリ・ババがしかりつけました。するとモルジアナは落ちついて、

「いいえ、私はあなたの命をお助けしたのでございます。これをごらんくださいまし。」
と言つて、商人がその中にかくしていた短刀を取り出して見せました。そして、この商人が、ほんとうは何者であつたかということを申しのべました。

それを聞くと、アリ・ババは、ありがた涙なみだにくれて、モルジアナをだきしめました。

「お前はわしの息子のおよめさんになつておくれ、そしてわしの娘になつておくれ、それがわしにできる一番の恩返しだ。」と、言いました。

さて、それからずいぶん後までも、アリ・ババは、こわがって、あのふしぎなほら穴へ行つてみようとはしませんでした。しかし、ある年の末、もう一度行つてみました。ところが、どろぼうたちが死んでからは、だれも来ないらしく、中は昔のままでありました。それでも、こわい者が一人もいなくなつたことがわかりました。

それから後は、「開け、ごま。」と、アリ・ババが、まほうの言葉を唱となえさえすれば、

あのふしぎな戸がすうーつと開いて、穴の中には、持ち出しても、持ち出してもつきることのないほどの、宝がありました。それで、アリ・ババは、国じゆうでならぶ者もないほどの、大金持になってしまいました。

青空文庫情報

底本：「アラビヤナイト」主婦之友社

1948（昭和23）年7月10日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：京都大学点訳サークル

2004年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アラビヤナイト

三、アリ・ババと四十人のどろぼう

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 菊池寛

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>